

「私のイチバンボシ」
第9話

水瀬真理佳

○陽斗のマンション・寝室（朝）

スマホのアラームが鳴り、カーテンが自動で開く。窓から差し込む外の光が陽斗の顔に当たると。

陽斗、眩しそうな顔で少し目を開けて大きく伸びをする。

陽斗「くううっ……！」

のそのそ起き上がり、ベッドサイドの眼鏡をかけて部屋を出る。

○同・キッチン（朝）

陽斗、目が覚めてきた顔で冷蔵庫を開ける。

中はスカスカで、調味料、ペットボトルの水、酒しか入っていない。

陽斗「……」

陽斗、水を取って扉を閉める。

スマホにメッセージ通知。

画面にはへ佐藤…おはようございます。

おにぎりか何か買っていきましたよ
か？　　と。

陽斗、監視カメラがないか天井の角や
後ろを確認する。

陽斗「くしゃつと笑って」エスパカよ

へ陽斗…ツナマヨよろしく！　と返信。

佐藤から「了解です」のスタンプ。

陽斗、シェイカーにプロテインの粉と
水を入れて振りながらリビングへ。

○同・リビング（朝）

陽斗、椅子に座ってプロテインを飲み
ながら台本をめくる。

×　　×　　×

陽斗、台本を片手に部屋の中を歩き回
りながらセリフを呟く。

テーブルの上には空のボトルとスマホ。
スマホのアラームが鳴る。

画面は「9…50」の表示。

陽斗「やばっ！」

と、慌てて身支度する。

○同・エレベーター前（朝）

陽斗、エレベーターが来るのを待っている。

佐藤からメッセージがくる。へ佐藤…記者っぽい人がいます。すぐ乗り込んでください

陽斗（苦笑して）もう家バレてんだ

陽斗、「了解」のスタンプを送る。

○同・車寄せ（車内（朝））

陽斗、エントランスを出て足早に車に近づく。

カメラを持った記者が寄って来る。

記者「田中さんですよ。ちょっと山口さんのお話聞かせてもらっていいですか？」

陽斗「（わけが分からない顔）すみません、急いでるので」

と、無理やり後部座席に乗り込む。

佐藤「出します！」

と、アクセルを踏む。

○道路・車内（朝）

佐藤、運転しながら、

佐藤「すみません。記者っぽい人いたんで場所変えようかと思ったんですけど、逆に早く乗り込んだ方がいいかと思って」

陽斗「うん大丈夫。ありがとう」

佐藤「山口さんがなんとか言ってました？」

「

陽斗「うん。なんでだろ……」

佐藤、神妙な顔をする。

佐藤「あ、そこにツナマヨあります」

陽斗の隣にビニール袋。

陽斗「ありがとう」

陽斗、袋からおにぎりを出して食べる。

○宮本家・えまの部屋（朝）

えま「んっ……」

えま、目を覚まして枕元のスマホを見る。

画面は5…30の表示。

えま「まだ三十分もあるじゃん…」

えま、ごろんと反対を向いて目を瞑る。

すぐに体を戻してSNSを開く。

えま「（画面を見て）えっ、なにになにに!?」

と、驚いて飛び起きる。

画面には「ちょっと大きい」と書かれ

た女優・山口美玲の投稿。サイズが合

っていない指輪をした美玲の手とテレ

ビの画面、美玲の部屋着と色違いを着

た男性の足元が見切れている。

えま、真剣な顔でSNSの投稿を見て

いく。

美玲の投稿のスクショに矢印で添削の

ように書き込みされた写真の投稿。実

際の写真と比較されている。

「指輪…陽斗くんが動画でつけてた。

メンズサイズ展開のみ」「部屋着…某

有名部屋着ブランド。隣の男？と色違い」
「テレビ…陽斗くんのドラマ最終回」

ファンによる悲鳴のコメントが続く。

「うわ無理、朝からしんどすぎる」

「恋愛するなどは言わないけど匂わせ

とかする女選ぶのはがっかり」
「ねえ、

これまさか同棲とか言わないよね？」

えま、自分に言い聞かせるように、

えま「…いや、たまたまでしょ。たまたま

…」

と、落ち着かない様子。

○同・洗面所（朝）

えま、ポトとしながら顔を洗う。歯

磨き粉を手のひらに出し、顔に塗り込

む。

えま「あ、ニキビできてる…」

えま、鏡に映った自分の顔を見る。

歯磨き粉だとは気づいていない。

えま「はあ……」

と、水で洗い流す。

○ 同・リビングダイニング（朝）

えま、テーブルでパンを食べながらずつとスマホを見ている。

美香「ちよっとー。ご飯中くらいやめなさ

い！ のんびり食べてたら学校遅れるわよ」

えま、スマホで時間を見る。7…15の表示。

えま「やばい！」

と、食パンを口に詰め込む。

○ 高校・教室（朝）

「おはよー」と言いながら生徒が登校してくる。

桃香、すでに席に座っている。

扉から入って来たえまに手を振る。

えま、力なく手を振って自分の席に座る。

桃香、心配な顔でえまに近づく。

桃香「おはよ！ どうした？ なんか元気な

いけど……」

えま「ちよつと朝から悶々としちゃって……」

えま、桃香に美玲の投稿を見せる。

桃香、眉をしかめる。

桃香「この山口美玲って何者なの？ 私聞い

たことないんだけど……」

えま「元々モデルで女優もやってるんだけど。

ユニクラがデビューする前に陽斗くんとカ

ップル役で共演したの。その時から付き合

ってるんじゃないかってファンが勝手に

妄想したりはしてたんだけど、こういうの

出るのは初めてで……」

桃香「この人が勝手に匂わせてるだけじゃな

いの？」

えま「そう思いたいんだけどさ！ でもこの

間他のグループの人のことで匂わせてたモ

デルがいて、超炎上したんだけど。結局そ

の二人は本当に付き合ってたみたいなの。

だから、匂わせるからには何かあるのかな、
って……」

えま、俯く。

桃香「もう田中さんに直接聞いちゃえば？

えまはそれができちゃう超ラッキーなオタ

クなんだから」

えま「山口さんが陽斗くんのこと匂わせてる

けど付き合ってるんですか？』って？ム

リムリヤバすぎるでしょ私！」

と、顔の前で手を振る。

担任・谷口が教室に入って来る。

谷口「ホームルーム始めるぞー座れー」

桃香「今日はもう電源切りな！これ以上S

NS見るとますます萎えるよ！」

と、言い残して席に戻る。

えま、大きくため息をついてスマホの

電源を切る。

○テレビ局・控室（朝）

佐藤「陽斗さん一応報告なんですけど、今S

N Sでこれが広がってて……さっき記者に聞かれたのってこれがあったからかもしれ

ないです」
佐藤、美玲の投稿を見せる。

陽斗「山口さんのSNS？　これがどうしたの？」

佐藤「この見切れてる人が陽斗さんなんじゃないかって騒がれてるんです」

陽斗「いや、まさか！　なんでそんな話になっ

ってんだ（失笑）」
佐藤「この指輪が陽斗さんがつけてるやつと同じだとか、このテレビに映ってるのが陽

斗さんのドラマの最終回ってところでそういう話になったみたいですよ」

陽斗「うっわほんとだ！　気づいた人すごいな」

佐藤「じゃあこれは別に陽斗さんじゃないんですね」

と、肩の力が抜ける。
陽斗「真面目な顔で」うん。マジで違う！」

佐藤「一応チーフにも報告してます。特に事

務所から何か言ったりはしないですけど」

陽斗「なんかお騒がせして申し訳ない……」

佐藤「別に陽斗さんは何もしてないですか

ら！」

陽斗「ほんと、たまたまだと思うけどね」

佐藤「（明るく）ですよね！」

○同・廊下（スタジオ（朝））

陽斗、控室を出ると悠真が立っている。

悠真「おはよ！」

陽斗「おはよ！」

二人、歩き出す。

悠真「はるピ！朝から超燃えてたねえ」

陽斗「さっき大樹から聞いた」

悠真「（イジめるように）あの隣で見切れてたの

ってマジではるピ！？」

陽斗「んなわけないだろ！」

と、悠真に肩パンする。

陽斗「ごめん、冗談。でもあれ本当にワンチ

ヤンわざと匂わせてる説あるよ」

陽斗、鼻で笑う。

陽斗「なんでだよ。たまたまだろ」

悠真、そうは思っていない様子。

陽斗「……ん？」

悠真「(首を横に振って)いや別に。それより、

えまちゃんに連絡した？」

陽斗「え？」

悠真「騒がれてるやつは俺じゃないよって」

陽斗「それ自意識過剰すぎだろ俺。えまが全

然気にしてなかったら恥ずかしいやつじゃ

ん」

悠真「ふはは。確かに」

陽斗「それにえまは多分『これは違う』って

切り替えてそうな気がする」

悠真「(ニヤニヤして)なるほど。自信あるわ

けだ」

陽斗「(照れ臭そうに)自信とかじゃないけど

……」

二人、スタジオに入る。

陽斗と悠真「お疲れ様です！」

スタッフ「お疲れ様です。よろしくお願
いします」

○カフェ・店内（夕方）

えま「んー美味しい！」

桃香、美味しそうにスイーツを食べる
えまを見ながら、

桃香「えまのそういう切り替え早いところ、

私すごく好き」

えま「桃香に言われて一日スマホの電源切っ
てたからちょっとメンタル回復した！ や

っぱデジタルデトックス？ 大事だね」

桃香「そうそう。SNSはただの憶測がいつ

の間にか事実みたいに流れることとかある
し、ネガティブなことも多いし、見すぎは

禁物だよね。自衛していかない」と

えま「なんか今回も、陽斗くんは何も悪くな

いのに陽斗くんの悪口言ってる人いるし。

山口さんの誹謗中傷もすごいし。事実関係

分かんないのに、それは違うでしょって感じ。見ててすごい疲れる」

桃香「情報開示請求とかされたら丸裸なのにね。みんなアホだなあ」

えま「陽斗くんに酷いこと言ってる人みんなそれしてほしい！　パパに頼もうかな：：」

桃香「本当に酷いやつは事務所も対処するよ。今そういうの問題になってるし」

えま「そうだよね」

○事務所・会議室（夕方）

部長・二宮、チーフ・後藤、弁護士・高野が話し合い。

宮本はリモートで参加。

後藤「今ネットで炎上している山口さんの投稿の件ですが、一応マネージャーに確認させて、田中は一切関係ないとのことでした」

二宮「彼女だけじゃなくて田中に対する誹謗中傷も目立ってるなあ」

宮本（画面）「それ全部残しとけよ！　うち

は徹底的にやるからな！」

高野「ではそれを私の方に共有していただ
くと助かります」

二宮「分かりました」

宮本（画面）「先生、よろしくね」

高野「朝飯前ですよ」

後藤「今朝早速週刊誌の記者に当たられたみ
たいなので、近々記事も出るかもしれませ

ん」

二宮「しばらくかかりそうだな。マネジメン
ト部全体に情報共有頼んだぞ」

後藤「分かりました」

○リムジン・車内（夕方）

宮本、後部座席でスマホの画面を見つ
める。ロック画面には宮本が幼いえま
を肩車している写真。

宮本「大丈夫かな……」

○ 宮本家・リビングダイニング（夜）

えま、ソファに座ってテレビを見ながら笑っている。

宮本が帰って来る。

宮本「ただいまー」

美香、洗い物をしながら、

美香「おかえりなさい」

えま「チラッと見て」：：「おかえりー」

と、テレビに視線を戻す。

宮本、えまを見つめる。

えま、視線を感じて徹の方を向く。

えま「（怪訝な顔で）：：「なに？」

宮本「いや。思ってたより普通だから安心し

た。もっと発狂してるかと思って。陽斗の

こと：：「

えま「ああ：：「あれね。あんなの信じないか

ら！ どうせ山口さんの匂わせだもん」

と、テレビに視線を戻す。

美香、宮本の肩をトントンとして耳打

ちする。

美香「（小声で）朝はもうずっとスマホ見て落ち込んでたんだけどね」

宮本「（小声で）陽斗にも確認して、無関係だ
と。あとはこのまま落ち着くの見守るだけだ」

美香「そう。良かった」

と、安心する。

○同・えまの部屋（朝）

えま、SNSを見る。

「山口美玲熱愛」というワードがトレンドに入っている。

えま「まだこんなトレンド入りしてたんだ

あ。みんな暇だねえ」

えま、呆れながら内容を見る。

段々顔が強張っていく。

「山口美玲 深夜のお泊りデート♡お相手は某アイドル似の高身長イケメン」という週刊誌のネット記事。
タクシーを降りた美玲と男性がマンシ

ヨンに入っていく写真。
もう一枚は陽斗が記者に突撃されてい
るもの。
どちらもマンションのエントランスが
同じ。
「順風満帆 田中陽斗の知られざるプ
ライベート」という見出し。
「我々は自宅を出て来た田中陽斗に突
撃した」
以下、記事の内容。「記者「田中さん
ですよ。ちょっと山口さんとのお話
聞かせてもらっていいですか？」
田中「すみません、急いでるので」
そう言って田中は事務所の車に乗り込
んで仕事へ向かった。後日事務所に問
い合わせを行ったが、期日までに回答
はなかった。
「田中さん最近すごく雰囲気が変わっ
たんですよ。謙虚で控えめな方でした
が、自分の魅せ方が掴めてきたのか、

特に芝居の方で急成長してますよね。
プライベートが充実してるならそれも
納得です」(芸能関係者)「
えま、スマホの画面を伏せて深呼吸す
る。
改めてSNSを見る。
以下、投稿。「信じたくないけど、こ
の家のエントランスって一緒だよね」
：「山口美玲と写ってる写真は後ろ
姿だし、陽斗くんか分かんないって思
ったけど、これはもう：：「陽斗く
んの身長…180㎝ 山口の身長…170㎝
この身長差は全然あり得る。死にたい
：：「たまたま同じ家でしたとか言
うの？ ファン舐めんな」(ここまで
大事になったんだから事務所もなんか
言っただけほしい)「陽斗くんが夜会で答
えてた好きな異性の質問に山口美玲が
当てはまり過ぎててこれはもう確定。
(箇条書きで)・透明感ある化粧・黒

髪セミロング毛先ゆるパーマ・自分の

出演ドラマチェック」

えま、顔色が白くなる。

○事務所・会議室

二宮、後藤、佐藤がミーティング。

後藤「記事が出るのは分かってたけど、なん

だよこの隣の写真は！」

佐藤「これじゃあ、この写真に写ってる男性

が陽斗さんだって言ってるようなもんです

よね!? 違うのに！」

二宮「いちいち騒ぐな。マスコミが煽ってる

だけだ。公式コメントは出さずに様子を見

る。いいな」

後藤「はい」

佐藤「分かりました」

二宮「記者もしつこくなるだろうし、ユニク

ラウン全員移動は必ず誰かつけるよ」

後藤「もちろんです」

二宮「じゃあ何かあれば連絡くれ」

と、その場を離れる。

後藤 「田中の様子は？」

佐藤 「メンバーとかスポンサーに迷惑かけるのが申し訳ないって……あと、ブログでファンにちゃんと説明したいって言ってました」

後藤 、ため息をつく。

後藤 「悪いがそれは待ってくれ。そもそも、今回田中には何も非がないんだから、アイツが責任を感じることはない。ちゃんとフォローしとけよ」

佐藤 「はい！」

と、力強く頷く。

○ スタジオ・中

ユニクラウン五人で雑誌の撮影中。

シャッター音が鳴る。

スタッフの指示で表情とポーズを決める。

○同・控室

陽斗、表情が強張っている。

柊也、陽斗をチラッと見て、

柊也「陽斗。顔暗いぞー」

陽斗「！」

翼「もしかして記事のこと気にしてんのかよ。

あんなの無視だよ無視！」

陽斗「：：俺のせいでみんなにも迷惑かけて

るかも：：本当にごめん」

と、より顔が暗くなる。

凜太郎「はるピーが謝ることは何もないじゃ

ん！」

悠真「そうそう。こういうのは俺らにイジラ

れてるくらいがちょうどいいでしょ？」

メンバー、笑顔で陽斗を見る。

陽斗「みんな：：」

翼「てか陽斗さ。週刊誌撮られたの初めてだ

ろ？良かったじゃん！週刊誌童貞卒業

おめでと！」

と、陽斗の背中を叩く。

柗也「だから翼は声デカいって」

と、笑いながら翼を叩く。

悠真、爆笑する。

ドアのノック音がしてドアが開く。

スタッフ「……あの、最後にお一人ずつお願

いします……」

スタッフ、気まずそうに呼びに来る。

陽斗、苦い顔をする。

凛太郎「もしかして、今の聞こえちゃってま

した？」

スタッフ「苦笑して」いや……あの、はい」

凛太郎「ふざけながら」違うんです！ はる

ピー大昔に童貞は卒業してます。誤解しな

いであげてください！」

翼「ノって」それもそれでなんかおかしいだ

ろ！ 童貞だっていいじゃん！」

悠真「ノって」そうだよ凛。ユニクラはみん

な童貞アイドルできてたんだから」

柗也、手に負えないという顔をして目

元を手で押さえる。口元は笑っている。

陽斗「……分かったから、俺が悪かった！
お願いだから柊也以外黙って。みんなが聞
いてるから！」

ドアの前にはスタッフが集まり、楽し
そうだなとメンバーを見ている。
陽斗、少し表情が明るくなる。
翼、悠真、凜太郎、ニヤニヤしながら
指でバツをつくって自分の唇に当てる。

○ 高校・教室

昼休みが始まった教室。

生徒が机を合わせて弁当を食べ始める。
えま、机に突っ伏したまま動かない。
桃香「えま。購買行くけどなんか買ってこよ
うか？」

えま「……突っ伏したまま首を横に振る。
……大丈夫。ありがとう」

桃香、心配そうな顔をする。
男子、不思議そうな顔で寄って来る。

男子「宮本どうしたの。なんかあったん？」

小林もなんか朝からずっとあんなだし」

男子が指さす方向にえまと同じように

机に突っ伏す紗耶香。

桃香、声のトーンを落として男子に説

明する。

桃香「えまの推しに熱愛報道が出て。それで

ちよっと……いいからそっとしておいてあ

げて」

男子「ふーん。ていうかアイドルも恋愛ぐら

いするだろ。別に犯罪じゃないんだから大

目に見てやれよ」

と、普通のトーンで。

桃香、「しっ！」っと口に指を当てて

男子を睨む。

男子「……」

桃香「……確かにアイドルだって恋愛は自由

だよ、そんなこと分かってる！でも私た

ちオタクはそう簡単に割り切れないの。相

手の女に対して『なんでわざわざ匂わせな

んてするかなあ』ってイライラしたり、推

しに對して『なんでこんな女選んだの？』
って思っちゃってそんな自分にモヤモヤし
たり。この歌歌ってる時、この質問答えて
る時、あの女のこと考えてるのかなとか思
ったらもうメンタルえぐられる。それがオ
タクなの。めんどくさいって思うかもしれ
ないけど、こっちはどうにか自分でこの感
情を処理しようとして頑張ってるの！だから
そつとしといて！分かった？」

男子、桃香の勢いに押される。

男子「やべえ……」

桃香「いいから、行くよ！」

男子「おい、押すなって」

桃香、男子の背中を押して教室を出て

いく。

えま、動かない。

えま M「あー無理だ無理だ。メンタル死ぬ。

事務所が何も言わないのはきつとあれが本
当にたまたまで、陽斗くんと山口さんは何
もないからなんだと思いたい。でも、火の

ないところに煙は立たないって言うし、も
しかするとあの記事は事実で、写真で隣に
いた人も陽斗くんなら：：今はその対応に
追われて何も言っていないだけかもしれない
：：あの二人、いつから付き合ってたんだ
ろう。お似合いだもんなあ。私は本当にた
だ妹みたいに可愛がってもらってただけな
のに：：特別なのかもとか勘違いしてほん
とバカ。陽斗くん前に雑誌で年上好きって
言ってたし、山口さん全部当てはまってる
じゃん」
えま、俯いたまま立ち上がり教室を出
ていく。

○ 同・屋上

えま、柵に寄りかかってボーっと景色
を眺める。
扉が開き、工藤が入って来る。
えま、気付いていない。
工藤、えまの背中を見て、

工藤 「えま……？」

えま、ビクッと反応する。

俯いたまま足早に工藤の横を通り過ぎ

ようとする。

工藤、えまを行かせないように立ち塞

がる。

えま、立ち止まる。

えま 「……（か細い声で）通してください」

工藤 「いいよ、俺が出ていくから。先にいた

のはえまだし」

えま 「……」

工藤 「一応聞くけど、飛び降りよう……とか

は考えてないよね？」

えま、顔を上げる。

えま 「……え？ あ、ああ……さすがにそこ

までは……」

えま、生気の抜けた顔。

工藤 「……何か俺にできることある？」

えま、工藤を見て警戒する。

工藤 「なんて、こんなこと言う資格ないのは

分かってるんだけど……でも、どうでもいい奴にしか話せないこととかもあるじゃない？」

えま「……」

工藤「……文化祭の時の彼氏となんかあった……？」

えま「（気まずそうに）……あの人は彼氏なんかじゃないです」

工藤「……でも、キスしてたよね？」

えま「（自嘲するように）あれは、カッコいい彼氏を連れて先輩を見返したいって話したら、フリをしてくれただけなので……」

えま M「ああ……何ペラペラ話しちゃってるんだろう私。先輩絶対引いてるよ……」

と、地面を見つめる。

工藤「……そうだったんだ」

と、俯くえまを見つめる。

工藤「でもそうやって思いつめるくらい、そのいつのこと好きなんだね」

えま、工藤の顔を見る。

工藤 「えまの顔見れば分かるよ」

えま 「：：私なんかじゃ全然釣り合わないんです：：宇宙レベルの存在なので」

工藤 「(ふざけて)もしかして、宇宙人なの？あの彼氏」

えま 、宇宙人の恰好をした陽斗を思い浮かべてクスッと笑う。

工藤 、えまの笑顔を見てホッとする。

工藤 「えまの気持ちは？ちゃんと伝えた？」

えま 「まさか！ 言いません！ 言えませ

ん！」

工藤 「俺に告ってくれた時の勢いはどうしたんだよ！ (笑いながら)それとも、俺は

宇宙人じゃないから言えた？」

えま 「あれはあれ、これはこれです：：！」
と、モゴモゴ答える。

工藤 、申し訳なさそうな顔をする。

工藤 「えま：：あの時は本当にごめん。俺、調子に乗ってた」

工藤 、えまに頭を下げる。

えま、なんて言えればいいか分からない
顔。

工藤「顔を上げて」ちゃんと顔見て謝りたか
ったんだ。こんな時間かかったたたけ
ど」

えま「……」

工藤「扉を開けて、
工藤「じゃーな！ 健闘を祈る！」

と、屋上を出る。

えま「……！」

えま、何かを言いかけて閉まった扉を
見つめる。

○ 同・階段

工藤、階段を下りている。

屋上の扉が開いてえまが階段下を覗き
込む。

えま「先輩っ！」

工藤、足を止めて顔を上げる。

えま「あの……受験、頑張ってください！」

えま、ニコツと笑ってグッドマークを
する。

工藤「サンキュー！」

と、階段を下りていく。

えま、スッキリした顔。

○ミラベル・バックヤード（夕方）

えま「お疲れ様です」

と、中に入ってきて来る。

勇輝「：：お！お疲れ」

勇輝、えまの様子を伺う。

えま、鏡の前で髪を結んでいると鏡越

しに勇輝と目が合う。

えま「：：なに？」

勇輝「いや：：ネットで見たからさ。えま大

丈夫かなって：：」

えま「ああ：：うん。確かに学校ではね、も

うメンタル死んでた！でもね、ちよつと

だけ回復したの！だから大丈夫！あり

がと！」

えま、ピースする。

勇輝「……そっか」

えま「いっそのこと、やっぱ本人に確かめちやおっかなあゝなんて」

と、独り言。

勇輝「（笑いながら）アイドルにどうやって聞

くんだよ」

えま「あ……確かに！ そうだよね、確かめようがないよね！」

と、誤魔化す。

ポケットの中のえまのスマホが震える
画面に【新着メッセージがあります】

○同・バックヤード（夜）

えま、ロッカーを開けてエプロンを脱ぐ。

ポケットからスマホを取り出す。

えま「!?」

陽斗からメッセージがきている。

既読にしないように内容を確認。

へ陽斗…久しぶり。元気？へ陽斗…
なんか最近お騒がせしてます…
へ陽斗…今日電話とかできたりす
る？へ陽斗…自分の口からちゃんと
伝えたくてへ
えま、急いで帰り支度をする。

○同・外観（夜）

えま、陽斗に返信する。
へえま…バイト終わったのでいつでも
大丈夫ですへ
既読はつかない。
えま、スマホを握ったまま歩き出す。

○大通り・歩道（夜）

車が行き交う大通り。
えま、スマホを確認しながら歩いてい
る。
着信音がして画面を確認する。陽斗
くん」の表示。

えま「(緊張して) : : もしもし」

陽斗の声「 : : もしもし? ごめんねこん時間。バイトお疲れ様。今帰り? 」

えま、ホツとして涙がこぼれそうになるのを唇を噛みしめて堪える。

えま「いえ。大丈夫です」

陽斗の声「じゃあちようど良かった。家に着くまでこのまま話してもいい? 」

えま「はい、大丈夫です」

陽斗の声「あの : : ネットはもちろん見てるよね : : ? 」

えま「 : : 見ました。山口さんの投稿も、今日の週刊誌の記事も : : 」

陽斗の声「だよな : : そのこと、話してもいい? 」

えま「 : : 本当のこと聞けるなら聞きたいですけれど、でも知りたくない気もして。ここ最近田中担はみーんなモヤモヤしてたんですからねっ!? 陽斗くんは何も悪くないけど! 」

陽斗の声「……申し訳ない……でも、ほんとにみんなが思ってるようなことは何もないから！　これだけは信じてほしい！」

えま、立ち止まり目を閉じて安堵の表情。

えま「（強がって）もちろん私は分かってましたけどね！　きつとそうなんだろうなって。

陽斗くんもブログに本当のこと書きたいけど、きつとダメって言われてるんだろうなああって！」

陽斗の声「（笑いながら）さすがえまだわ。わざわざこんな電話しなくてもお見通しだったか」

えま「……」
えま、立ち止まる。

○テレビ局・控室（夜）

陽斗、椅子に座って電話。

陽斗「えま……？」

えまの声「……ていうのはただの強がりで、

本当は頭の中ぐちゃぐちゃでした。陽斗く
んの言葉だけを信じたいのに、週刊誌とか
に惑わされる自分もいて……ちよっと苦し
かったです」

陽斗、言葉に詰まる。

えまの声「でも！ 今日こうやって陽斗くん
の口から聞けたから、私はもう大丈夫で
す！ 『陽斗くんが違うって言ってたよ』
とは言えないけど、『陽斗くんを信じよ
う！』ってSNSで呟きます！」

陽斗「えま……」

えまの声「だから、ひどいこと言ってるネッ
トの人なんて気にしないでください！ 田
中担はちゃんと分かっていますから！ みんな
な陽斗くんの味方です！ だから安心して
ください！」

陽斗、愛おしそうな顔。

陽斗「……ありがとう。俺、これからも頑張
るから」

○ 宮本家・外観（夜）

えま、マンションの前に着く。

えま「無理だけはしないでくださいね！」

陽斗の声「うん！　そろそろ家着いた？」

えま「はい、ちょうど今着きました！」

陽斗の声「そっか。ごめん急に電話して」

えま「いえ！　私の方こそ、忙しいのにこう

やって連絡もらえて嬉しかったです。あり

がとうございます！」

陽斗の声「じゃあまたね。おやすみ」

えま「はい！　おやすみなさい！」

えま、すっかり元気になる。

○ テレビ局・控室（夜）

陽斗「嬉しそうに」俺の方が元気もらっちゃ

ったよ」

と、スマホを見つめる。

○ 同・控室・外（夜）

柊也、翼、悠真、凜太郎がドアの前で

聞き耳を立てている。

翼「なあ、陽斗なんて言ってる？」

凜太郎「聞こえない……でもさっき笑ってた」

悠真「ちゃんと話せてるんだね」

柊也「うん。えまちゃんなら大丈夫だろ」

凜太郎「(ニヤニヤしながら) やっぱさ、はる

ピ―ってえまちゃんのこと……そういうこ

とだよね？」

翼「それ以外ないっしょ」

悠真「本人は色々気にしてるのか、頑張って

隠してるけどね」

凜太郎「はるピ―可愛いところあるな」

スタッフが近づいてきて不思議そうに

四人を見る。

柊也「あ、時間ですか？」

スタッフ「あ、はい。田中さん中にいらっし

やいますか？」

翼「(ニヤニヤしながら) うん、田中さんは中

にいらっしやるんですけど……」

悠真「終わったかな？」

柊也「仕方ないよ。入るぞ」

凜太郎「ごめんねはるピー！」

と、ドアを開けようとする。

○同・控室（夜）

ドアの外が騒がしい。

陽斗、ドアを開ける。

外には柊也、翼、悠真、凜太郎、スタ

ッフが立っている。

翼「下手な芝居で」おー陽斗。ちょうど今

呼ぼうと思っ」

凜太郎「下手な芝居で」なんかしてた？ 大

丈夫？」

陽斗、柊也と悠真を見る。

柊也、申し訳なきように顔の前で出を

合わせる。

悠真、苦笑しながら頷く。

陽斗、状況を察する。

陽斗「失笑して」で、盗み聞きは誰が言い出

したわけ？」

と、柊也から順に見ていく。

柊也「まさか！」

と、隣の悠真を見る。

悠真「違うよ！」

と、隣の凜太郎を見る。

凜太郎「そんなわけないじゃん！」

と、隣の翼を見る。

翼「ほら、正直に言えって」

と、隣のスタッフの肩に手を回す。

スタッフ「え!? なんの話ですか!？」

五人、フツと吹き出して笑う。

スタッフ「マジで全然分かんないんですけ

ど！」

スタッフもつられて笑う。

○ 部屋（夜）

電気がついていない部屋。

布団の中でスマホの画面が煌々と光っ

ている。

女子の手がフォルダの写真をスクロー

ルしている。写真は全て手を繋いで走っている。えまと陽斗を写したものだ。どれもブレて顔はハッキリと分からない。SNSの投稿画面に文字を打ち込む。【これってユニクラウンの田○陽斗？】写真を付けて投稿ボタンを押す。閲覧数がどんどん増えていき、コメントが表示されていく。【これどこの学校？】【この制服は○高校】【隣の女誰？ 学生？】【妹じゃない？】【田中に妹いないよ。お姉ちゃん】【もしかして彼女？】【田中担生きてる？ 私は死んでます】【どう見ても相手高校生で草。田中陽斗終わったな】

○電車・車内（朝）

満員電車。男子高校生が窓際に立ってSNSを見ている。

画面には「これってユニクラウンの田
○陽斗？」という例の投稿。
男子高校生、「女の方絶対ブスじゃん
このレベルでもS・Sのアイドルと付
き合えんだぞそれとも田中がB専なだ
け？」と投稿。
スマホを仕舞って英語帳を開く。

○大学・講義室（朝）

授業前、学生が「おはよー」と次々と
講義室に入って来る。
講義室の端の席で一人俯いて座ってい
る女子大生。
机の下で隠すようにSNSを見ている。
画面には「これってユニクラウンの田
○陽斗？」という例の投稿。
女子大生、冷めた目で「陽斗くんの手
握ってる隣の女マジ死んでほしい」と
投稿。
スクロールして似たような投稿にいい

ねを押していく。

「隣の女消えて」 「特定屋さんよろしくお願ひします」 「みんなで吊るし上げよ」

○ オフィス街・歩道（朝）

スーツを着た男女五人が会話しながら歩いている。

集団の一番後ろの男、SNSを見ながら歩いている。

画面には「これってユニクラウンの田○陽斗？」という例の投稿。

男、笑顔で「田中陽斗は女子高生に手を出している犯罪者です」と投稿。

女性の声「ちょっと！早くー！」
男「顔を上げて」ごめんごめん！

男、スマホを仕舞って集団を追いかける。

○ 宮本家・えまの部屋（朝）

えま、ベッドから起き上がって大きく伸びをする。顔がスッキリとしている。

○同・洗面所

えま、洗顔フォームを泡立てて顔を洗い、タオルで顔を拭く。手のひらに化粧水を出して優しく肌になじませる。

えま「嬉しそうに」あ！ニキビなくなっ
た！」

えま、鏡に近づいて頬を指で押さえる。大きく深呼吸してニコツと笑う。

○同・リビングダイニング（朝）

えま、テレビを見ながらトーストを食べ
べている。

カーリー「ワンツワンツ」

カーリー、窓の外に向かって吠えている。

えま「んー？　　どうしたのカーリー。外出た

いの？」

カーリー「ワントツ！」

えま「しようがないなあ」

えまが窓を開けるとカーリーが嬉しそ
うに走って行く。

えま、コーヒーとトーストの皿を持っ
て外に出る。

○同・バルコニー（朝）

えま、椅子に座って優雅に朝食を食べ
る。

× × ×

美香「えま？　随分のんびりしてるけど、時

間大丈夫なの？」

美香が声をかけに来る。

えま「え？　今何分!?」

美香「二十分だよ」

えま「ウソ！　やばい！」

えま、食パンを口に詰め込んで慌てて

中に入る。

カーリリもえまを追いかける。

○ 同・洗面所（朝）

えま、鼻歌を歌いながら髪の毛をヘアアイロンで巻いている。

○ 事務所・中（朝）

「SNSマーケティング」のドアプレート。
ト。

○ 同・SNSマーケティング部（朝）

色も形もバラバラのテーブルが散らばっている。今どきのオフィス。それぞれのテーブルに個性が出ている。室長・太田渉（30）、ジュースとジャンプを持って部屋に入ってきた。自席に座り、ジュースを飲みながらパソコンに向かう。テーブルの上には他に漫画とチョコレート

トの山ができています。

太田「おっと。これはちよつとマズいかな
く？」

と、画面に顔を近づける。

画面、「ネット騒然。二股？ 未成年

淫行？ 田中陽斗の真実」というまと

めサイトの記事。

太田「ごめん至急部長とユニクラのチーフに

連絡とって！ 緊急！ 最優先！」

社員「はいっ！」

と、受話器を取る。

太田「さて、どうしたもんかな……」

太田、買ってきたジャンプを読み始め
る。

○交差点・歩道（朝）

横断歩道で通学や通勤前の人信号待

ちしている。

制服を着た女子高生が会話。

女子1「ねえ、はるピのやつ見た？」

女子2 「見た見た。でもあれほんとはるピ
ーなのかな？」

女子1 「でも他にもあの文化祭で見たって人
いたよ」

女子2 「マジ!? じゃあ手繋いでたの彼女確
定じゃん」

女子1 「なんか女優とかモデルなら諦めつい
たけど、同じJKっていうのが……なんか

ガッカリ」

女子2 「どんだけ可愛いんだろうね」

女子高生のスマホには例のツイート。

○事務所・会議室（朝）

関係者が集まって会議。

二宮 「朝から電話が鳴りやまず回線はパンク
寸前。問い合わせフォームからもメールが
絶えません」

宮本、真顔で例の投稿やコメントを読
み上げる。

宮本 「隣の女マジ死んでほしい」 「田中陽斗

は犯罪者』：：へえ』

二宮 M 「ヤバイ：：」

後藤 M 「ブチ切れてる：：」

太田 M 「そりゃそうだ：：」

宮本 「先生は？」

二宮 「もうすぐ着きます」

宮本 「法に触れるような事実は一切なし。でも事務所として指導徹底。HPはこれで更

新

二宮、頷く。

宮本 「SNSは頼んだぞ。証拠は一つ残らず保存」

太田 「お任せあれ」

宮本 「スポンサーのフォローは？」

二宮 「すでに担当にはそれぞれ連絡とるよう指示出しています」

宮本 「今日陽斗の予定は？」

後藤 「今日は早朝から全員でMVの撮影です」

宮本 「何も気にするなって伝えとけ。アイツすごい責任感じるだろうから。こういうの

は、俺ら裏方の仕事。そうだろ？」

後藤「（頷いて）伝えておきます」

宮本、拳を机に叩きつけて、

宮本「陽斗だけじゃなく俺の愛娘まで好き勝手言うとはいい度胸じゃないの。覚悟しと
けよ！」

全員、頷く。

○ロケバス・車内

ルートエー・直哉、大和に例のツイー
トを見せる。

直哉「なあ、これ……」

大和、例の投稿を見て目を見開く。

大和「は？ 何これ」

直哉「この女の子ってえまちゃんだよな？」

顔ははっきり写ってないけど制服とかで全然特定できちゃうだろうし、なんなら書き込んでるやつもいる」

コメントには「この制服は○○高校」

「○○高校E・Mさん」

大和「陽斗アイツ……マジなにやってんだよ」
と、怒りの籠った目。

○スタジオ・控室

ユニクラウン、衣装を着たまま休憩中。
佐藤、ノックをして入って来る。

佐藤「陽斗さん、ちょっとお話が……」

翼「俺ら席外す？」

佐藤「あ、いやあ……」

陽斗「（何かを察して）いいよ。俺の話ってこ
とはユニクラにも関係あることだよね」

佐藤「……実はSNSで拡散されてる写真が
あ……」

佐藤、陽斗にタブレットを渡す。

陽斗、タブレットを見て顔色を変える。

凛太郎、横から覗いて、

凛太郎「これはるピー？　しかも隣にいるの
って……」

柊也「えまちゃん……？」

悠真と翼も画面を覗き込む。

佐藤「（頷いて）もう上は動いてるんですけど、しばらくは騒がれると思うので情報共有です。あと社長からの伝言で『気にしなくていい』と」

陽斗、SNSをスクロールしながら顔を歪める。

柊也「ひどいなこれ……」

悠真「情報開示なんとかってできないの？」

佐藤「SNS班と高野先生が動いています。社長が徹底的にやるってブチ切れてるらしいし、みんなそのつもりです」

翼「陽斗に対しても度が過ぎたコメント多すぎだろ。許せねえ」

陽斗「……えまは!? これ見ちゃってるよね!?」

佐藤「すみません、そこまでは……」

陽斗「……そうだね」

悠真「社長が動いてるなら大丈夫だよ」

と、落ち着かせる。

陽斗「……えまは周りを警戒してくれてたの

に。俺が軽率だった……」

柊也「過ぎたことなんだから仕方ない。悪いことは何もしてないんだから」

と、肩をトントンする。

陽斗、えまにメッセージを送る。

「陽斗…俺のせいでごめん」

「陽斗…全部俺のせいだから」

「何も悪くないからね」

陽斗、思いつめた顔で画面を見つめる。

○ 高校・教室

教師、教壇で板書している静かな授業中。

女子（小声で）「えま」

えま、手を止めてノートから顔を上げる。

隣の女子、斜め前の男子を指差す。男子、左右に大きく船を漕いでいる。

えま、女子と顔を見合わせながら肩を

震わせる。

（了）